



情報誌

FAR

41 号

事務局：公益社団法人 日本放射線技術学会事務局内

〒600-8107 京都市下京区五条通新町東入東鋸屋町 167 ビューフォート五条烏丸 3F

TEL:075-354-8989. FAX:075-352-2556/http://www.jsrt.or.jp. Email:office@jsrt.or.jp

《ごあいさつ》

年のはじめに
(今年こそ仲間を増やしましょう)

副会長 川上 壽昭



謹んで新年のお慶びを申し上げます。FAR 会員の皆様が、日本各地で、そして各ご家庭で、良い年を迎えられたことと、心よりお慶び申し上げます。併せて今年が、皆様にとって明るく実りの多い年となる事を、お祈りいたします。

ご存じのように 2001 年（平成 13 年 4 月）に発足し、今年で足かけ 15 年を迎え、本会の 2 本柱である情報誌の発刊と春秋に開催されます会員相互の懇親会も担当役員・幹事の方々の献身的な努力と心配りによって、順調に推移し今日を迎えることができましたことは大変に喜ばしいことではありますが、反面新規入会者の伸び悩みが続く現状は頭の痛いところであります。

今年は未年、未年の由来・語源を調べてみると、「未」は、まだ枝が伸びきらずに木の部分をえがいたもの。また、「漢書、律歴志」では、曖昧の味と解しています。これには、果実が熟しきっていない未熟な状態を表すと言う解釈と暗いの意味で植物が茂り、暗く覆っている状態を表しているという二通りの解釈があるといわれています。更に「説文解字」では未の意味とし、果実に味が生じ始めた状態と解しています。しかし、本来の意味からすれば、果実が熟し切っていない状態と考えるのが妥当とされています。

これを「未」としたのは庶民に十二支を浸透させるために、動物の名前を当てたものであり、順番や選ばれた理由は定かでない。と述べられています。

この語源をそのまま FAR 会に当てはめるならば、足かけ 15 年経っても会員が増えない状況から考えて FAR 会は未だ「未」の状態でしょうか。私は、決して「未」の状態とは思っていません。

目的を持って組織された会の「力」の源は、会員の結集にあります。「数」の力と会員一人ひとりが活動に「参加・参画」することにより、本来の力が発揮できるということになります。仲間が多いほど、幅広く活動ができるだけでなく、会の維持・向上の強化にもつながるものと考えています。仲間を増やしましょう。

新春を寿ぎ漢詩を披露します。

新春の天地瑞光の中 四海洋洋として旭日紅なり

万事回り来たりて風物改まり 汪然立志氣隆々なり

内 容

1. ごあいさつ 副会長 川上壽昭
2. 第 71 回総会学術大会へのお誘い 大会長 平野浩志
3. 2015 FAR 会 懇親の夕べ 代表幹事 伊藤敏夫
4. 2014 FAR 会 北海道の旅報告 萩原康司
5. 会員動向
6. 会からのお知らせ
7. 投稿「札幌の秋 公園通りは涼しかった」
相模原市 遠山坦彦
8. 続編「人生におけるターニングポイント」(2)
池田市 金尾啓右
9. JSRT 情報
10. 連載《ご当地自慢》わが街 山形 山形市 加賀勇治
11. 編集の小窓

元旦の朝はすべてがめでたい光につつまれる 四方の海もゆったりと朝日に赤く染まっている
あらゆるものが一巡して新しくなったような気持ちがする 私も今年こそ、と気持ちがたかぶって
くる

新しい年が皆様にとって実り多い年になりますことを、そして FAR 会がその存在を光り輝かす年になりますことを祈念いたします。

《第 71 回総会学術大会へのお誘い》

ご 換 拶

第 71 回総会学術大会 大会長 平野 浩志



FAR 会の皆様、信州大学の平野です。FAR 会入会から早くも 3 年目の春を迎えます。日頃より、ご指導ご鞭撻を賜り感謝申し上げます。いよいよ私が大会長として開催いたします、第 71 回総会学術大会の年がやってきました。皆様、応援をよろしくお願いいたします。JRC2015 のメインテーマは、『Be Cool and Practical』です。名づけ親である JRS 会長の犬友先生は、放射線医学の大きな特徴は、医学の目覚ましい進歩と、医療技術・機器の絶え間ない進化の双方から大きな影響を受けている。放射線医学の

すべての領域で日常臨床の要望に応えつつ進化し続けるためには、冷静に現状と近未来とを見据え、実際的に対処することがもっとも肝要だと述べています。

大会長としての私の拘りは単純撮影です。『胸部にはじまり胸部に終わる』と言われた胸部単純撮影も、デジタル化により進化を遂げています。『進化する胸部単純撮影』のテーマでシンポジウムを行い、引き続き福井大学の伊藤春海先生に『正常胸部 X 線像の学び方、教え方』の特別講演を頂きます。伊藤先生は、ご存知のように胸部 X 線画像を、肺の標本と X 線解剖学から分析されています。さらに目玉として、診療放射線技師に必須である胸部単純 X 線画像の正常構造を習得できる、伊藤先生の寺子屋を開設します。

X 線の位相コントラストを用いて、軟部組織の画像化を研究されています、東北大学多元物質科学研究所の百生敦先生に、『X 線を極める』—X 線タルボ・ロー撮影に至るまで—の特別講演をお願いしています。X 線一筋に研究されてきた哲学のお話が聞けることを楽しみにしています。

実行委員会企画としましては、技術活用セミナーで救急診療にどう関わるかを 6 回シリーズで、また ImageJ の活用として、DR, CT, MRI での使い方を 3 回シリーズで開催します。教育委員会の企画として「乳癌」と題し、検査から治療まで一貫した教育講座を計画しています。また学術委員会企画として「研究テーマとして考える画像診断における読影の補助」と題して、各専門部会から演者を選出していただき、技術学会としての見解を明確に示すシンポジウムを計画しています。盛り沢山の企画になっていますので、どうか楽しみにぜひご参加をお願いいたします。

最後に、RSNA2014 に行って来ました。RSNA には初めて参加しましたが、規模の大きさに驚き、機器展示では、中国の会社の出店の多さに脅威を感じながらも、それに伴う画像がないことに不信感を募らしたしだいです。



《2015 年 FAR 会懇親の夕べ》

春の懇親会へのお誘い

代表幹事 伊藤 敏夫

第 71 回総会学術大会もパシフィコ横浜会議センターでの開催となり、会場の選定から折衝まで地元横浜の萩原先生にお願いして、素晴らしい懇親会場「利久庵」を確保することができました。

日本の「和食」がユネスコの世界文化遺産に登録されましたが、和食といえば高級な懐石料理や寿司などが思い浮かびますが、忘れてならないのは昔から庶民に食べられてきた「お蕎麦」ではないでしょうか？北海道十勝産の蕎麦を丹精こめて練りこんだコシと風味が身上の「手造り木鉢蕎麦」を落ち着いたお座敷テーブル席で召し上がっていただきます。

記

開催日時 2015年4月18日（土曜日） PM6:30 開宴（受付PM6:00）
会場・電話 利久庵本店、横浜市中区真砂町2-17・045-641-3035
交通 JR京浜東北線「関内駅」南口下車、徒歩5分
会費 会員 9,000円（補助金 1,000円）、非会員 10,000円
参加申込締切日 平成27年3月15日 必着
参加連絡 会誌差し込み葉書にてお返事願います。



《2014 秋のFAR会報告》

「登別の名湯とアイヌ文化を巡る旅」

世話人代表 萩原 康司

10月11日（土）「札幌コンベンションセンター」（札幌市）

台風18号が、大きな爪痕を残して去り、19号が日本列島に向かっている最中の出発です。本日の天候は、曇り。風が強く、少し寒い位の季候。予報では、明日は暖かく晴とか。小笠原大会長を始め、多くの大会役員に見送られて、午後1時登別へ出発。

「インディアン水車」（千歳市）

水車を利用し、鮭を捕獲する装置で、道庁の職員がアメリカ視察時、コロンビア川で見聞し日本へ伝えた。始めて千歳川に設置されたのは、明治29年。本日は土曜日の午後、係員も居らず、水車の水門が閉ざされ、川に鮭も見当たらず、残念。名称の由来は、原住民のインディアンが使っていた訳ではなく、連想からの名の様。

「地獄谷」（登別市）

高温の水蒸気や硫黄を噴出する風景は、別府温泉・雲仙そして箱根と全国各地に点在しており、地球のマグマ活動を身近に見ることの出来る貴重な場所です。

「宴会」（登別グランドホテル）

何と言っても旅の楽しみは、ご当地の食材を食し、友と語り合うことでしょう。8年前の「北の集い」で、皆さんの酒豪振りを拝見しており、今回も北海道の銘酒や芋焼酎・ワインなど数多く用意しました



サケ捕獲用のインディアン水車

が、皆さん8歳年とられた事を失念しておりました。

宴は、山田会長の挨拶、本間先生の乾杯に始まり、和やかに終宴し、幹事部屋での二次会に引き継がれました。翌日の二日酔いが心配。

10月12日(日)「熊牧場」(登別市)

本日は予報通り快晴、絶好の観光日和。ロープウェイにて、山頂の熊牧場へ。第一牧場では、雄10頭が飼育されており、餌を強請る姿は、愛らしい反面、腹を見せ寝そべったままの横着な熊など様々です。第二牧場は、雌22頭が展示され、地下に入るとガラス越しに直接熊と対面できます。やはり、顔の大きさに驚かされます。展望台から、真円形のクツタラ湖(ダテカンバの茂る処)が遠望できた。

「アヨロ川」(白老町)

昨日のインディアン水車では、鮭の姿を見る事が出来ませんでした。運転手さんの発案で、少し寄り道をし、アヨロ川で数10匹の鮭の遡上姿を見ることが出来、感激。

「アイヌ民族博物館」(白老町)

この施設は、30年前に開設され、アイヌ文化の伝承・保存並びに調査・研究そして教育・普及を目的としている。約5,000点にのぼるアイヌ民族資料、北方少数民族(ギリヤク人・オロソコ人)の資料が250点集められ、多くの図書が展示されている。正面に入って直ぐに、巨



大なコタンポリクリ(村長)の像が建ち、奥左側にポロト湖の水面が輝き、右側には5棟の茅葺の小屋(チセ)が建ち並びます。

本日のアイヌ文化の解説と民族舞踊は、一番手前のチセとの事、中は300名程座れる椅子と囲炉を設けた舞台があり、台湾と韓国のツアー客で超満員。アイヌの正装の男性が、舞台中央に進み、歴史と文化の説明を始めるとニケ国語の同時通訳が入り、国際色豊かです。印象的だったのは、アイヌの女性は、10歳頃になると5~8年かけて口の周りに入れ墨をする風習が語られ、それによって初めて一人前の女性に認められるとの事。



一人前になるのも、何とも痛々しい限りで、この風習は、大正の頃には無くなった様です。タブカラ（祝宴の際の踊り）の説明の後、7～8人が輪になって、数歩進み後退しながら祝意を込めた歌詞が唄われ、最後にムツクリが演奏され、アイヌ文化の一担を見る事が出来ました。

「昼食」（恵庭市）

カニの福屋にて、三種類の蟹に舌鼓を打ち、その後海鮮丼を食し、北海道の味を堪能された事と思います。

「新千歳空港」（千歳市）

約束の午後2時30分に、空港へ到着でき、台風の影響もなく順調に飛行機は飛んでいる様子に一安心、皆様の無事な帰宅を祈りながら、私達も千歳を後にしました。

参加された皆様のご協力に感謝致します。

幹 事：柴田崇行・菊池 務



《会員動向》

「会員数」 平成26年11月末現在：95名（内、名誉会員5名）

自己退会者（情報誌第40号発行以降）：2名（松谷一雄、久住佳三）

《会からのお知らせ》

平成26年度第2回世話人会議報告

平成26年（2014年）10月11日 札幌コンベンションセンター会議室にて開催。

山田会長以下16名が出席し、以下の議題について討議・審議した。

1. 会務報告
2. 業務報告および収支計算書報告（4月～9月）
3. 第2回運営委員会報告
4. 次年度事業計画・収支予算計画については正副会長と総務委員会に一任する事とした。
5. 情報誌関係：第41号を予定通り平成27年1月15日に発行する予定等。
6. 懇親活動
 1. 「2014 懇親の夕べ」会計報告
 2. 「2014 登別の名湯とアイヌ文化を巡る旅」について
参加者数：21名で計画通り行う。
 3. 「2015 懇親の夕べ」企画（本号《2015 FAR会懇親の夕べ》参照）
 - ・代表幹事：伊藤敏夫
 - ・開催日時：平成27年（2015年）4月18日（土）午後6時30分開宴
 - ・場 所：利久庵本店 横浜市中区真砂町2-17（電）045-641-3035
 - ・会 費：9,000円（会員）、10,000円（非会員）
 - ・申込方法：情報誌第41号に同封された申込用葉書を用いて行う。
 - ・申込締切日：平成27年3月15日必着
 4. 「2015 ○○への旅」代表幹事の選任
北陸地区在住の世話人が居ないため、懇親活動担当世話人（神澤良明世話人）を代表幹事とし、金沢市在住の宮地利明会員を幹事に指名し、具体的企画案を次年度第1回世話人会議に提案する事とした。
 5. 「2016 懇親の夕べ」代表幹事の推薦
代表幹事に前田幸一世話人を指名した。
7. その他
 1. 新入会員勧誘についての議論

2. 会議関係

- ・ 平成 27 年度第 1 回世話人会議開催予定
開催日：平成 27 年(2015 年)4 月 18 日(土) 開催時間：(未定)
場 所：パシフィコ横浜 会議センター内(予定)
- ・ 平成 27 年度第 1 回「運営委員会・総務委員会」合同委員会
開催日：平成 27 年(2015 年) 8 月 (予定)
場 所：関東地区 (予定)

《投 稿》

札幌の秋 大通公園は涼しかった

相模原市 遠山 坦彦



日本放射線技術学会秋季大会札幌を楽しんだ。FPD を使った患者被曝が話題になっている。むかし、デジタル化時代を前に、画質と被曝について議論した記憶と重なって、研究発表に興味を惹かれた。

「医療情報は誰のものか？ー医療クラウドがトリガーを引く患者と医師の覚醒ー」の講演を聴いた。CD (PDI) の (で) 画像データは誰のものか？と抱いた疑問が、時代の変遷でまたまた議論になるとは。興味が再度湧いて来た。

患者被曝・管理と医療情報に関連する講演、研究発表を中心に聞いて回った。難渋するのは、英文字略語である。EI、CTDIvol、DIP、RDSR、DRL など、え〜っとそれは・・・、聞き漏らさない努力が辛い。夜学に力を入ると回復エネルギーが一層必要になる。

下り坂にある能力の諸々を、それなりの鮮度に引き上げる努力の毎朝であった。

こんな事もある。

「こまかいの大丈夫ですか」 う〜ん！考える私「何ですか。もう一度」「こまかいの大丈夫ですか」と店員。ドラッグストアで、1,683 円の買い物に 5,000 円札を出した時のことだ。お札を指さし「これでどうぞ」(何が不足か？分からんな〜、こまかいのを出せっか？と言いたかった)。次に機会があれば「大きいのは勿論、こまかい釣銭の受け取りも大丈夫だよ」と言ってやろう。接遇マニュアルか、日本語が分かりづらくなって、私は困るのだ。

調剤薬局で薬をもらいに。「常に飲んでいる薬はありますか。薬の名前を教えてください」さ〜て、困った。(薬の名前なんか憶えているかよ) 私「提出している、お薬手帳を見ていただくと、正確な名前が分かると思います」 無然とする薬剤師に、ページを開いてコレとコレと指し示す。管理指導にお金を払っている筈だが勘違いかな？何か、ヘンなの！ どこかの店員と同じか・・・、放射線部では？・・・大丈夫だろう？

街中で声高に話す人が多い。相手はケイタイか、スマホか。後ろで「もしもし・・・」煩いのだ。学会場で隣に座った人が明るいスマホを上げたり下げたり。プレゼン見るのに目障りで止めて貰った。PC 画面の明かりを反射させる顔も近くに見える。目障りだな〜。

台風 18 号と 19 号が連続上陸した。その狭間で開催された第 42 回秋季学術大会札幌に 1,850 名余の参加があったと聞いた。広い会場で研究発表やシンポを聴き、勉強させていただいた。大勢の方々、大会関係各位のお世話になった。感謝申し上げたい。

大通公園噴水前のベンチで涼しい風に吹かれ、焼きトウモロコシを齧った。少し恥ずかしかったが、やっと実現できた。離れたベンチの女学生は“じゃがバター”らしい。

放射線技術学会は毎度、面白い局面に出会える。一部を述べてみた。聞きたい会場が複数に亘り移動に忙しい。無職・無役の身で学会参加の意味を考える時もあり、他人にも言われるが、好奇心だけで動いている。いま暫く学会参加を続けられたら幸いと考えている。





啓右、薬局外交員に転職する

今度は薬屋の外交員であった。同じ福山市内の一番の繁華街、通町（とおりちょう）の端っこにある藤井宗（ふじそう）商店である。福山市内、府中方面、鞆の浦方面、松永・尾道方面、笠岡方面など、それに福山市内とその周辺を毎日、日を変えてお得意回りをし、注文をとる。毎日毎日、これも自転車に乗っての仕事で、住み込みで働いた。仕事に馴れるに従って注文とりも上手になり、売り上げ成績はどんどん上がっていった。或る薬局では、とことん、いやになるほど値切られて、この店の手前 50 メートルにさしかかると、私は自転車から下りて二つほど深呼吸をし、息を整えてから店に入ったものだ。しかし、とても優しくしてくれる店も勿論沢山あった。水呑（みのみ）の診療所では、婦長さんが注文の段取りをしてくれて、「金尾君、二階の係長さんに言ってあるから、そこに行って注文を貰いなさい」と、毎週励ましてくれた。

夏の、店での宴会のあと、薬店の裏庭の縁側に座り、タバコ「ピース」に火をつけて深く吸い込んだところ、目が回ってひっくり返った。これが初めての喫煙であった。

この頃、私は「どん底の自分」を見つめていた。薄暗い住み込みの小さな部屋の中で、まるで、ガラス瓶の底に閉じ込められて絶対に外に出られない自分、というものを、外部から冷静に？眺めていた。これから先どのようにして、ここから脱出できるのか全く分からないし、可能性もない。しかし、心に決めた。毎日を一生懸命に生きよう。そうすれば道はおのずから開ける。このような考え方は多分、本の読みすぎからきたのであろう。岩窟王の主人公モンテクリスト伯爵「エドモン・ダンテス」の心境か、それとも楽天的な性格の故か。今にして思えば、こんなのきな性格に生まれてきて良かった。

若いうちは、とりあえず人の言うことをちゃんと聞き、あとで考える。人が話したいときにはとりあえず黙って聞いてあげる。聞いてもらった人は、多分、気が楽になるのではないか。そうなれば、私の、一つの役割がそこにある。意見が違う人も、私の強い人もいるが、心の中では彼らをどう思おうとも先方には分かるまい。これが、自分の強い武器になるかもしれない。世の中は知恵比べみたいなものさ。だから、自分なりに考えて独創力を活かす。ここに自分の才能を伸ばす点を見出そう。金がないならそれで、出来る事に挑戦する。これは学歴や肩書きで得られるものではない。何とはなしに他人様が考え込むような思考を自分に持たせてやろう。これが私の挑戦なのだ。

水呑（みのみ）町の開業医に「日野医院」があった。老先生がやさしい奥さんと、静かに開業していた。いつ行ってもあまり患者さんがいない。にもかかわらず、私が訪問すると、必ず奥座敷に招き入れられてお茶をよばれる。なにがしかお話をし、ろくな注文もなしに医院を辞す。やさしい老夫婦であった。何十年かのちに、妹が私に話したことは、その准看護婦さんが妹と同級生で、或る時彼女が妹に聞いたのだ。「お兄さんはうちの先生の養子になる気はないかしら、って先生が聞いてくれって」「そりゃあないわ、兄はもうじき自衛隊に入るつもりよ」「あらあ、そう。先生残念がるわ」。

夜学に挑戦する

薬屋の外交員にはなったものの、このままで人生を終わるわけには行かない。誠之館の定時制課程に通学を決めた。しかし、住み込みの身であるから、すぐさま薬局の若奥さんからクレームが来た。金尾君を住み込みにしているのは夜の薬局の販売を目的にしているので、夜学に通うのであれば住み込みの必要はない。通勤にしてくれ、というのだ。それで、中条村の自宅から通勤することにした。これは辛かった。

朝早く自宅を出ると、湯田村駅まで 4 キロの道を徒歩で出る。福山に出ると、薬局の自転車で郊外への訪問販売を行い、夕方になると、それは大概 5 時を過ぎるのだが、徒歩で夜学に行く。終業は 9 時頃である。福山駅では 9 時半頃の電車に乗る。湯田村駅に着くのが 10 時前。それから 4 キロの上り道を自宅まで徒歩する。生徒会があると電車は 30 分乃至 60 分遅くなる。

期末試験があるときは、友人の藤井博君の家に泊めてもらって徹夜した。彼の家は、湯田村駅に近くて私が自宅まで徒歩で帰る時間が勉強に使えるからだ。試験のたびごとに彼の世話になった。そういうわけで、試験成績はそれほど悪くはなかった。

存子おばさん、啓右のために涙を流す

通学では、特に闇の中の帰り道がつらかった。竹藪の裏の農家の犬に突然吠えられてびっくり仰天ということもあった。雨の夜は、崩れた道路の穴に落ち込んで、胸まで埋まった。空腹と疲労で道をまっすぐ歩けず、それこそ千鳥足でよたよたと家までたどり着くこともあった。しかし、土手下から見上げた我が家の窓に明かりが灯っているのが見えると安堵感が湧き上がる。

ある晩、湯田村駅に下りた時、深水の存子おばさんとばったり出会った。

おばさんは、目に涙を一杯ためて「啓右さん、もう学校に行くのはお止めなさい、そんなことをしたら死んでしまう」と私をいさめて下さった。私は、その言葉を聞きながらお別れした後、考えた。「そうだ、ここで死んでもいい、これは天命である。しかし、死なない場合もある。今こそ、ここが自分に与えられた試験の場だ」。これで私の心はしかと安らいだ。本の読みすぎとはこういうものか。と時々思い返す時がある。「レ・ミゼラブル」のコゼットはもっとひどかった。この頃の私は、現在の自分が人生で「最低の状況」、すなわち「どん底である」と強く認識していたのである。この気持ちを終生忘れまい。自分らしく生きよう。ドンキホーテは無鉄砲にも愛馬？ロシナンテを駆って風車に立ち向かったではないか。ユーモアも忘れまい。生涯にわたって額に苦労の皴を寄せることも絶対にするまい。

幸い、内山先生のお勧めで奨学金の申請をしたところ、8月になって申請が受理され、3か月分の奨学金がまとまって入ってきたので、早速自転車を購入した。これは、自転車卸商店にいた時代にお得意様だった神辺町の自転車店で購入した。さあ、これで中条の自宅から福山まで自転車で往復することが可能となったぞ。自転車がこれほど有難いものだと思ったことはなかった。怖いものはもうなくなったのだ。そのくせ、自衛隊に入隊するまで貰っていたこの奨学金を、実際に返金した時期は、結婚して西宮市社家町の貧困生活のさなかであり、大日本育英会からの督促状を読んだ由美子から散々叱られながら返金した、ということである。

大日本育英会からこのように多大の恩恵を受けたことには心の底から感謝している。

転職の動機

この店の事務員に、Fさんという高齢の方が事務員で働いておられた。小説「坊ちゃん」の「うらなり君」を連想させる雰囲気であった。痩せて青白く、さっぱり精彩がない、電球型のどくろ（されこうべ）の姿を連想してください（すみません）。タバコが大好きで年中白煙をくゆらせていた。この方が、夕方、薄暗い事務室で、裸電球の下、事務用の腕抜き（肘の汚れを防ぐ黒い布製の腕輪）をして、痩せこけた白い腕を組み、タバコをぽーっと燻らせている姿を見ていた私は、「私の一生の、なれの果てがこのような姿であってはならない。ここを絶対辞めなければならない」と決意した。ある意味で、この方は、私に決意をさせて下さった大恩人なのである。

ところが、問題は、辞めても次に何をするか、である。極端なことをしなければならない、と決めた。共産党に入るか、自衛隊に入るか、などである。しかし、共産党はロシア系であること、満州での日本人捕虜の大多数がシベリアに抑留されて長期間過酷な労働を強いられ、多くの方が死亡せざるを得なかったことなどが、小説などに沢山書かれており、はなはだ抵抗感があつたので、共産党入りは止めた。自衛隊に入るか、となると、深水のおじさんが（前海軍中佐、航空母艦蒼龍の砲術長）真っ先に賛成してくれた。「啓右君、よくぞ決めた、私の仲間が北部方面隊の司令官だ、浦部聖（うらべ ひじり）によく言っておくから」。母は、自衛隊に行くことは賛成してくれたが、航空自衛隊に行くとは飛行機に乗るので墜落したら終わりだ、海上自衛隊に行くと、これは船乗り同然でお嫁さんが来ない、陸上ならともかく安心できる、といって陸上自衛隊は賛成してくれた。

啓右、警察からの誘いを断る

自衛隊への入隊申し込みをしたところ、警察から身元調査がきた。村の駐在所のM巡査が巡察の途中で、隣家の藤井さんが野良仕事をしているところに出会ったらしい。「この辺に金尾さんという家があるかね」

「あるけど、なにしに行きなさる?」「自衛隊に入るといふんでどんな人かと」「それなら、いいことばかり書いたら間違いはないで。それは保証つきじゃあ。もうそこへ行かんでええ。ここからまっすぐ帰りなされ。いいことばあ書いとったら間違いはないよ」このようなことを、「おうち」のおじさん（藤井鉄市さん）が母に話してくれた。まもなく採用のための身体検査が大門の福山地区病院で行われた。体重が少ない私は、水を一杯飲んで体重計に乗った。ついで肺活量である。それがすむと、胸囲を測定。やせているので、検査員には分からぬように少し息を吸って測定した。「はい、息を吸って」と言われても吸気の余裕はない。それでも、無理をして息を吸い込んだら「意外と少ないなあ」と言いながら検査記録に記入していた。

ほどなくして、福山の警察署から呼び出しが来た。行くとすぐ署長室に通された。「君は自衛隊に行くのかね?」と、署長が私に尋ねた。「はい、そのつもりです」「そうか」と言いながら私の身元調査書らしき書類に目を通して「君、自衛隊もいいけれど、警察に来ないかね。警察に入ってくれたらすぐに警察大学校に行行って勉強させてあげられるが。君のような優秀な人材を求めているんだが」「有難う御座います。でも、もう自衛隊に行く、と決めていますので」と断ってしまった。あとから、あの時、断らずに警察大学校に行行って幹部になっていたら今頃はどうなっていたのだろうか、と由美子に言ったことがある。笑われた。「そうね、貴方のことだわ。暴力団から賄賂を貰ってくびになっているでしょ」。 続く

~~~~~

### 《JSRT 情報》

『第 71 回総会学術大会』 大会テーマ：「Be cool and Practical」

大会長：平野 浩志（信州大学附属病院）

会 期：平成 27 年 4 月 16 日（木）～19 日（日）

会 場：パシフィコ横浜会議センター他

『第 43 回秋季学術大会』 大会テーマ：All you need is Rad. (Radiology)

活かし、活きる、放射線技術

大会長：市川 勝弘（金沢大学医薬保健研究域保健学科系）

会 期：平成 27 年 10 月 8 日（木）～10 日（土）

会 場：金沢市文化ホール

~~~~~

《連 載》《ご当地自慢》

「わが街 山形」

山形市 加賀 勇治



森編集委員長から「ご当地自慢」の執筆依頼があった。気軽に引き受けたものの、山形に自慢できるものがあるのか考えてみると、私は山形市に住んで 30 数年経ったのに、地元のことをあまりにも知らないことに気づいた。これを機に山形の自慢は何か調べてみたので、私の視点で紹介させていただく。

山形市は山形県の中央部東寄り、山形盆地の南部に位置し県庁所在地でもある。市域の東側は南北に連なる奥羽山脈、西側には白鷹丘陵が横たわる。蔵王山系を源とする馬見ヶ崎川が流れる扇状地として、豊かな自然に囲まれ、市街地と田園が共存する景観と、古くから城下町として栄えてきた歴史的、文化的財産に恵まれた街である。内陸性気候が顕著で、気温の較差、とくに夏と冬の寒暖差が大きい。人口約 25 万人。面積約 380km²（東西 21.5km×南北 27.5km）

【自慢の名所】

◆山寺（宝珠山立石寺）

山寺は宝珠山立石寺を中心とした門前町一帯を呼び、昭和 25 年（1950 年）国の名勝史跡に指定された。立石寺は貞観 2 年（860 年）に慈覚大師・円仁が開いたもので、人々の信仰が集まる霊場である。根本中堂は、国指定の重要文化財で、初代山形城主・斯波兼頼が延文元年（1356 年）に再建し、ブナ材で造られた日本最古と言われる建物。堂内には慈覚大師作と伝えられる木造薬師如来坐像が安置され、比叡山延暦寺か

ら移した『不滅の法燈』が、千年を超える光を灯し続けている。また、芭蕉が山寺を訪れた際に詠んだ句「閑さや岩にしみ入る蟬の声」はあまりにも有名。山門から奥の院まで石段 800 余段、時間にして約 50 分。周りは奇岩怪岩と樹木が四季折々の美しさを醸し出しており、仁王門や五大堂など景勝地がある。五大堂は天下泰平を祈る道場で、山寺随一の展望台でもある。登らなければ味わえない感動がそこにはある。



◆元木の石鳥居



元木の石鳥居は、山形市鳥居ヶ丘にあり現存する日本最古の鳥居である。瀧山（りゅうざん）信仰の象徴であり、昭和 27 年には国が重要文化財に指定。正確な建立年代は不明だが天延年間（973-976 年）頃と考えられている。総高さ 351cm の凝灰岩製の鳥居で、左柱の径が 97.1cm、右柱の径が 92.3cm、柱は丸い礎石の上に立って、両柱の間隔は 280 cm。笠木と島木は一石から彫出し、島木の左下端は巧みに接ぎ合わせ、貫は柱を貫通せず、両側から穴を掘って挿込んでいる。柱をはじめ各

部分が太く、幅に対して高さの低いことが古い様式の特徴を示す。他に天仁 2 年（1109 年）建立とされている国指定重要文化財の「成沢の石鳥居」がある。

◆文翔館

文翔館（旧県庁舎及び県会議事堂）は、大正 5 年に建てられたイギリス・ルネサンス様式を基調としたレンガ造りの建物。大正初期の洋風建築を代表する貴重な遺構として、昭和 59 年、国の重要文化財に指定された。創建当時の工法をもとに忠実に復元された建物や豪華な内装は、大正の古き良き時代の薫りを今に伝えている。館内には復元の記録とともに山形の歴史・文化を紹介する展示室もある。自由に見学することができ、希望の方にはガイド（ボランティア）がご案内。



【自慢の温泉】

◆蔵王温泉（スキー場）

蔵王連峰の西麓にある温泉で標高 880m に在り、平成 22 年に開湯 1900 年を迎えた日本屈指の古湯。山形が誇る名湯。5 つの源泉群と 47 の源泉があり湧出量も豊富。温泉は湯花が混じった乳白色で、泉質は硫黄と酸性が強い（pH1.25～1.6）。湯につかると肌にピリピリと刺激があり、肘や膝など湯上りにはツルツルになる。皮膚に良く効き、肌を白く滑らかにするため「美肌の湯」の異名を持つ。温泉内にはいくつかの共同浴場や日帰り入浴施設、蔵王大露天風呂がある。

共同浴場は、温泉街の中央にある下湯、風情ある佇まいの上湯、地元の人々もよく利用する川原湯がある。すべてが 100 メートル圏内。散策をしながら気軽に湯めぐりを楽しむことができる。

蔵王大露天風呂は、温泉街から上の台ゲレンデに上がり、そこから急な坂道をさらに登った所。温泉と並行して川がながれており、上流が女



湯、下流が男湯。それぞれにあつ湯とぬる湯の湯船がある。一度に 200 人は入れると言われる大きな風呂で、周りは森林に囲まれている。春～夏の森林浴や秋の紅葉と大自然を肌で感じながら、川の流れる音を聞き、青みがかった硫黄泉の温泉に入れるのは最高。冬季は閉鎖。

山形蔵王温泉スキー場は、蔵王温泉に隣接するスキー場。単独のスキー場としては日本で最大の面積を誇り、変化に富むコースが数多くあり、日本スキーのメッカ。大正 14 年開場。最初のリフト架設は昭和 26 年。現在は 14 のゲレンデと変化に富む 12 のコースに、42 基のリフト・ケーブル・ロープウェイがある。豊富な積雪量と抜群の雪質、安定したゲレンデコンディションを誇り、特に地蔵山頂駅から約 10km の「樹氷原コース」はスキーヤーやボーダーに根強い人気がある。

樹氷は、氷点下まで過冷却が進んだ水滴が吹雪と一緒に針葉樹のアオモリトドマツ等につぶつき、そのまま凍りついたもので、アイスモンスターとも呼ぶ。雪と氷に覆われて自然が作り出した芸術品。その美しい景観は世界でも評判。一目見ようと訪れる人が絶えない。昼と夜（ライトアップ）で一変する樹氷の表情も必見。樹氷シーズンに上部エリアに行く場合は万全の防寒対策が必要。



【自慢のまつり】

◆山形花笠まつり

山形市の中心街で毎年 8 月 5～7 日の夜、「花笠音頭」の唄に合わせて踊られる花笠踊りのパレードで、東北を代表する夏祭りの一つ。一夜に市の人口よりも多い 30 万人以上もの見物客が詰めかけ、“西の阿波踊り、東の花笠踊り”と言われるほど人気が高い。また、海外でも“Flower Hat Dance”の名で知られて、外国人見物客も数多く訪れる。華やかに彩られた山車を先頭に「ヤツショ、マカショ」の勇ましい掛け声と花笠太鼓が高らかに真夏の夜に響き渡る。艶やかな衣装に身を包んだ 1 万人を超える踊り手が市内目抜き通りをパレード。躍動感あふれるダイナミックな踊りと、山形の花である紅花をあしらった笠の波がうねり咲きこぼれる。



昔は一糸乱れぬ集団美が祭りの醍醐味だった。今は、華麗な正調女踊り「薫風最上川」、勇壮な正調男踊り「蔵王暁光」の他、花笠踊り発祥の地、尾花沢地方のダイナミックな笠回しや、趣向を凝らした創作踊りなど、多彩な踊りが観客を魅了。パレードの最後尾には飛び入りコーナーがあり、毎年、パレードに吸い込まれるように、一人、二人と見物客が加わっていき、熱気は最高潮。

【自慢の食べ物】

◆芋煮（日本一の芋煮会）

芋煮は山形の郷土料理のひとつ。食材は地域によって様々だ。山形市周辺では里芋、こんにゃく、牛肉、ネギの 4 種類のみ。味付けは醤油。隠し味に日本酒と砂糖を少々。これ以外の材料は一切入れない。芋煮は

汁ものではなくおかずでもない。芋煮としか言いようのない特別な食べ物なのだ。何はともあれ山形では、秋になると家族や友人達が河原で鍋を囲んで、わいわい芋煮を食べるのがあちこちで見られる。これが「芋煮会」で山形の秋の風物詩。



由来には色々な説があるが、この風物詩を山形の「食文化・秋の芋煮会」として、全国に発信するために開催されたのが「日本一の芋煮会フェスティバル」。開催日は 2014 年から敬老の日の前日に変更。会場は山形市内の馬見ヶ崎川河川敷。主役はなんといっても直径 6m の大鍋「鍋太郎」。鍋の大きさもすごいが食材の量もすごい。山形牛 A3 以上のものを

1.2t、里芋 3t、こんにゃく約 3,500 枚、長ネギ 3,500 本、味付けの醤油 700ℓ、隠し味に地酒 50 升、砂糖 200kg、そして山形の水を 6t 入れ、6t の薪（ナラ材）で煮炊きする。3 万食分の芋煮は圧巻。砂糖以外は全て山形の食材。これぞ「山形の味」というもの。おいしさもスケールもまさに日本一の芋煮。今年は他に 3m 鍋を使った新しい味の「しお芋煮」も楽しめた。芋煮で秋の山形を堪能してはいかが？



◆玉こんにゃく



“こんにゃく”と言えば、角こんにゃく・糸コン（しらたき）等が一般的だが、山形には丸いこんにゃく、つまり「玉こんにゃく」がある。発祥は明治 20 年頃、山形市の現ヤマコン食品の創業者、長谷川松四郎氏が手作りしたのが始まり。大きな鍋でグツグツと水を使わず、醤油だけで煮込むのが山形流。醤油の色と味が染み込んだところで、串に 4 個ほどの玉こんにゃくを刺して、山形名物の玉こんにゃくの出来上がり。アツアツの玉こんにゃくに、和がらしをピリリと効かせた素朴な味わいは、気軽に頬張れる伝統のファストフード。山形ではお

祭りやイベントなどではもちろん、学園祭、町内会の盆踊りなど、人が集まるところ必ずといっていいほど玉こんにゃくが販売される。歩きながら、おしゃべりをしながら、この玉こんにゃくを頬張る姿があちらこちらで見られる。山形の風物詩の一つ。多くの居酒屋や郷土料理店のメニューにも取り入れられ、人気の高い食べ物。山形はこんにゃくの消費量が日本一。山形市内にはこんにゃく料理専門店もあり、山形の味を求める観光客が多い。

◆冷やしラーメン発祥の地は山形市の栄屋本店。店主の阿部専四郎が「夏場に清涼味のある冷たいスープのラーメンがあっても・・・」と研究に研究を重ね、昭和 27 年の夏、冷たいスープでも油が固まらない、さわやかで風味豊かな冷やしラーメンを創り上げ、売り出したのが始まり。冷しラーメンは湯気が出てないことを除けば一見普通のラーメン。器も丼。言うまでもないが冷やし中華ではない。スープも麺も冷たく、氷を浮かべることもある。この氷が解けてスープが薄まらないよう氷はダシで作られている。通常のラーメンと同じようにたっぷりのスープに麺が浸されている。スープは醤油味が一般的。酸味がないため、とても食べやすくまろやかな味が特徴。ポイントは冷涼感。食べていると後頭部がキーンとしてくるという。驚異のラーメンだ。山形名物「冷やしラーメン」。今やその知名度は全国区。元祖の味を求めて、観光客や近所のサラ



リーマンらが行列をなす様子は、もはや山形の夏の風物詩といっても過言ではない。

◆食用菊（もってのほか）

秋の山形の味として、食べる菊「もってのほか」は欠かすことのできない旬の食材なのだ。シャキッとした歯ごたえ、さわやかな香りが甘くてほろ苦い味を引き立てる、山形が誇る元祖・エディブルフラワー（食べられる花）。正式品種名は「延命楽」。独特の風味と味の良さ、美しさから「食用菊の王様」と呼ばれる。もちろん、山形市が生産量日本一。薄紫の花びらとその一風変わった名前が特徴。名前の由来は「天皇の御紋である菊の花を食べるとはもってのほか」とか、「もってのほかおいしい」といったことだとか。近年テレビのクイズ番組で、ユニークな名前をもつ食用菊として出題されてから、知名度は一気に全国区。



食用菊は花びら（花弁）の部分を食べるが、もってのほかの花びらは筒状になっているため、茹でても形が崩れず、シャキシャキした歯ざわりが特徴。サッと茹でた花びらを、和え物、おひたし、酢の物にしたり、そのまま、天ぷらや吸い物など食べ方は様々。淡い紫色の花びらが茹でると鮮やかな紅紫色に変わり、料理の器の中で映え、食卓に鮮やかな彩りを添える。もってのほか、是非お試しを。

【自慢の果物】

◆さくらんぼ。

山形といえばさくらんぼ。全国生産量のおよそ7割を占める。初夏の訪れとともに可愛いルビー色の実を付け、一粒頬張れば甘酸っぱい果汁が口いっぱいに広がる。透きとおるようなきらきら輝くかわいい姿はしばしば宝石に例えられ「赤い宝石」などと呼ばれる。そしてさくらんぼと言えば、大正時代に16年かけて生み出されたおなじみの「佐藤錦」。人気・実力ともNo.1。口いっぱいに広がる甘みの爽やかな事、滴る果汁の多いこと。まさに粒揃いの赤く熟した果肉は食べる宝石。糖度がずば抜けて高く、ただのさくらんぼとは違う。食べればきっとわかるはず。この他にも「紅秀峰」「紅さくら」など佐藤錦を親にした品種も是非お試しあれ。市内には直売所や観光果樹園があり、収穫盛期の初夏にはニコニコ顔でさくらんぼ狩りを楽しむ大勢の人で賑わう。山形市の美味しいさくらんぼを是非。



◆ラ・フランス

全体がボコボコで不正円形、見た目の悪さから方言で「みだぐなす（見栄えが悪く格好悪いもの）」と呼ばれるラ・フランス。外見からは想像できないような、果肉のまろやかさと、他の果物にはない独特な香り、甘味を備えたフルーツの女王と言える果物。フランス原産で日本には明治36年渡来、山形へは大正初期に入った。昭和40年代になると、生食したときの美味しさから注目を集めだし、その後、グルメブームに乗って広く知られるようになった。山形は西洋梨の生産量が全国第1位。その西洋梨の中で最高峰と言われているラ・フランス。もぎたては硬くて食べられない。りんごや和梨と違い、木になっている間に完熟できない果物。そのため予冷と追熟が必要で、その期間（約半月）を経てようやく甘さが出る特別な果物。食べ頃の見極めがとても重要。香りが強くなり、



軸の周辺を軽く押して柔らかさを感じれば食べ頃。皮をむいた時、果汁がたくさん出るぐらいが最適。甘い香りの誘惑にグッと我慢。おいしい食べ頃を待ちわびる…。ラ・フランスは、そんな手間をかけるに十分値するおいしい果物。口の中に広がるさわやかな甘味と程よい酸味が絶妙なバランスで、そのとろけるような味と香りは、食べた人を女王様気分にしてくれるだろう。是非ご賞味を。

【自慢の花】

◆紅花

紅花は山形市・山形県の花として定められ広く親しまれている。紅花は、古来より末摘花、紅藍、久礼奈為などの美しい別名を持つ。原産地のエジプト・地中海沿岸からシルクロードを経て、飛鳥時代に渡来した紅花は山形で美しく花開く。特に江戸時代には、質・量とも日本一の紅花産地として栄え、山形の紅花は京都や大阪で大変重宝された。紅花交易は文化の交流にも大きな役割を果たし、巨万の富を築いた豪商も数多く現れた。現在も県内各地に、紅花に関する史跡や資料館があり、当時の記録をとどめている。



山形市内では特に高瀬地区で栽培が盛んで、アニメ映画「おもひでぽろぽろ」の舞台にもなった場所。7月になると紅花が咲き誇り、山の麓が黄橙色で染まる。同地区では30戸あまりの農家が主に染料用として紅花を栽培し、紅花染や料理、切り花に幅広く使用されている。花は、はじめ鮮やかな黄色で、徐々に赤くなる。葉のまわりにアザミそっくりのギザギザがあり、染物の原料として採る時は花だけを摘まなければならないので、朝露がついてとげが柔らかくなる早朝に花を摘む。

山形では、特産物として多くの染め物や料理などに活用。ほんのりと優しい色を活かした小物から、カラダにいい紅花食品まで、紅花が生み出した魅力ある商品を暮らしに取り入れている。

以上、山形の自慢を私の独断と偏見で紹介させていただいた。山形を訪れたら、是非ご連絡下さい。

~~~~~

#### 《編集の小窓》

会員の皆様には良い新年をお迎えになりましたでしょうか。今年もお健やかに明るく過ごされますようにお祈り申し上げます。情報誌41号、平成27年度新年号をお届けいたします。

さて、今号は、昨秋札幌で開催された第42回秋季大会に合わせて、萩原氏が企画された「登別の名湯とアイヌ文化を巡る旅」に参加された方々の楽しい雰囲気が伝わってくる様な内容の記事、遠山氏の投稿は、氏の未だに勉学に励んで好奇心旺盛で感服する内容の記事、金尾氏は、前月号に引続き「人生のターニングポイント」についての続編を投稿頂き、また、加賀氏には、《ご当地自慢》で山形の魅力を余す事なく掲載された内容の記事を投稿頂き、各執筆の方には、誠に有難うございました。

今回の特集テーマ「散策の小径」への投稿が有りませんでしたので、次号(情報誌42号)の特集テーマは、再度「散策の小径」で原稿を募集します。是非とも会員の皆様のご協力をお願いします。原稿募集要項については、前回情報誌40号の6頁に掲載されています。

なお、締切日は、平成27年4月15日でお願いします。

では会員の皆様、第71回総会学術大会における「2015 FAR会懇親の夕べ」でお会いしましょう。(橋本廣信 記)

#### FAR 情報誌 No.41 (非売品)

発行日 平成27年1月15日

発行者 山田勝彦

編集委員会 森 克彦(委員長)

石井 勉 橋本廣信

山田和美

森:連絡先 Tel&Fax. 049-225-2619

Email:mokamokawh@gmail.com